

仮囲いの中を身近に 感じてもらう取組み ～けんせつ小町活躍現場見学会の実施～

一般社団法人日本建設業連合会 広報部 参事 い お き 五百木 ゆう み 祐美

1. 現場見学会の狙い

「建設業と聞いて思い浮かぶものは？」という問い掛けに、子供たちは「工事！」「機械！」と口々に答えるが、大人であっても、建設業関係者以外で、仮囲いの中で何が行われているかを知る人はそう多くないだろう。駅前や街中など普段の生活で見かけることが多い仮囲いの中でつくられているものが、人々の安心・安全で快適な暮らしを支えていること、それらをつくる建設業という仕事は実には人々にとって身近で必要不可欠であることを知ってもらうには、施工中の建設現場を見もらうのが効果的な手段の一つであると考えます。

日建連が取り組んでいる一般向けの現場見学会の歴史は、2002年にまで遡る。当時、社会資本整備や建設業に対する意見や指摘は厳しさを増すばかりで、合併前の旧日本土木工業協会においてそれらにどのように対処していくべきかを検討した結果、地道な手段ではあるが、建設現場に直接市民を招き、社会資本整備や建設業の生の姿を見ていただくことから始めることとした。できるだけ多くの市民に参加していただきたいという趣旨から「100万人の市民現場見学会」と名付けられ、団体と会員企業が一丸となり全国各地の建設現場で大々的に見学会が展開されたのだ。

実施にあたり特に留意したのは、単に現場を案内するだけでなく、見学後に必ず意見交換の場を設けて参加者からの質問に丁寧に回答し、また、その構造物がつけられる目的や完成後に期待できる効果などを説明することで、相互理解の促進に努めることであった。

第1回目の見学会は、2002年にさいたま新都心関連の現場で実施された。その後、2005年に早くも参加者が100万人を超え、2010年に200万人、2017年には300万人に達した（表－1）。300万人達成時には、日建連ホームページで公募した男女中学生・高校生41名を招き、新国立競

表－1 市民現場見学会の歩み

2002年 11月	旧日本土木工業協会が「100万人の市民現場見学会」として開始 (第1回：さいたま新都心関連工事現場)
2005年 11月	参加者100万人達成 (記念イベント：首都高速中央環状新宿線代々木シールド工事現場)
2010年 11月	参加者200万人達成 (記念イベント：湯西川ダム本体建設工事現場)
2011年 4月	三団体合併に伴い、名称を「市民現場見学会」に変更
2013年 4月	「発注者と連携した現場見学会」開始
2015年 7月	「けんせつ小町活躍現場見学会」開始
2017年 11月	参加者300万人達成 (記念イベント：新国立競技場整備事業現場)



写真-1 300万人目とその前後の参加者にメダルを贈呈

技場整備事業の現場で記念見学会を行った。

リオデジャネイロオリンピック後に国際オリンピック委員会が公表した見解によると、夏季オリンピックのテレビ中継の総視聴者数は、最終的に世界の総人口の約半数にあたる36億人と言われている。

世界中が注目するイベントのメインスタジアムの完成形やそこで繰り広げられる世界最高峰のレースを目の当たりにした時、施工中の現場を見学した子供たちはきっと、日本を、そして建設業を誇らしく思うに違いない。現場見学会を通して「建設業のファン」を少しずつでも増やしていきたいと考えている（写真-1、2）。

2. 女子小中学生限定の現場見学会

夏休み特別企画として2015年から実施している「けんせつ小町活躍現場見学会」。女性が主体



写真-2 ビッグフラッグを使った記念撮影

的に活躍する現場を女子小中学生と保護者に見てもらう業界初の取組みも、今年で4年目を迎えた。今年は過去最多の19現場で実施を計画し、あいにく台風などの影響で2現場が中止になったものの、初めて実施した静岡県、福井県、滋賀県を含めた8都府県において374名が参加した（表-2）。

実際の建設作業の一部を体験する恒例の「お仕事体験」は今年も全現場で設けられ、タイル張り作業を体験した駅舎の新設現場では、子供たちが張ったタイルが竣工後もそのまま残る。ずれないよう細心の注意を払ってタイルを張り終えた子供たちは、ほっとした表情を浮かべながら「完成したら絶対見に来る」「パパにも見せたい」と満足そうに笑顔を見せた。

自身が携わった構造物が地図に残り、後世に渡って人々の役に立つという建設業の醍醐味を、ほんの一部分とはいえ子供たちにも是非味わってもらいたい（写真-3～10）。

表-2 4年間の実施実績

○実施現場数：61カ所

○参加人数：1,573名（子供894名 / 保護者679名）

2015年度（H27）	・東京、千葉、埼玉、神奈川、大阪、福岡の14現場（参加会員企業：10社） ・401名参加（子供226名、保護者175名）
2016年度（H28）	・北海道、宮城、埼玉、千葉、東京、愛知、大阪、広島、長崎の15現場（参加会員企業：13社） ・414名参加（子供240名、保護者174名）
2017年度（H29）	・北海道、青森、東京、神奈川、大阪、奈良、兵庫、福岡、長崎の15現場（参加会員企業：15社） ・384名参加（子供217名、保護者167名）
2018年度（H30）	・東京、神奈川、静岡、愛知、福井、大阪、滋賀、広島の17現場（参加会員企業：17社） ・374名参加（子供211名、保護者163名）



写真-3 子供たちと積極的に交流



写真-7 お仕事体験 タイル張り



写真-4 保護者からの声掛けも多い



写真-8 お仕事体験 モルタル手形づくり



写真-5 和やかな雰囲気での質疑応答



写真-9 お仕事体験 杭ナビを使った宝探し



写真-6 発注者のけんせつ小町も多数参加



写真-10 お仕事体験 トンネル内でのジャーテスト

建設業への理解促進を主な目的として始まった現場見学会は、近年、担い手確保という建設業界が抱える喫緊の課題に対しても大きな役割を果たしている。見学会に参加した子供たちが現場で感じた「すごい」「やってみたい」という気持ちを10年後20年後の就業につなげるためには、1日の楽しい出来事だけに終わらせない継続したアプローチが必要である。そこで今年は、その第一歩として、参加した子供たちから見学会の思い出を描いた絵日記を募集したところ、211名中78名から応募があった。「楽しかった」「また行きたい」などの感想だけでなく、現場見学やお仕事体験で得た学びや気づきも多数描かれており、子供の吸収力に改めて驚かされる。絵日記を読んだ現場担当者からは、「丁寧に書いてくれた絵やことばにとっても励まされた。ゼネコン社員にとって今後のやりがいにつながる」「今回のような見学者からの声は、現場で働く皆のモチベーションアップになる」「子供たちの心温まる感想と素晴らしい絵に感無量。我々の仕事や物事に打込む情熱が子供たちの将来に少しでも役立てれば」など感嘆の声が相次ぎ、自分たちの試みが子供たちの記憶に強く残ったことに大きな手応えを感じている。

子供たちにわかりやすい資料をつくるために言葉を探したり自身の業務を振り返ったりする時、そこで新たな発見をする。日々当たり前のように行っている作業をきらきらした眼差しで見つめられると、照れくさいけど嬉しくなる。職人さんも含めて現場が一体となり受け入れ態勢を整える過程で、人の動かし方を知る。子供たちからのストレートな質問に、建設業界を目指そうと決めた初心を思い出す。子供たちに対応したけんせつ小町たちにも、この見学会でしか得られない学びや気づきがきっとあったはずだ（図－1①～④）。

3. 誰もが働きやすい建設業へ

国土交通省が2014年8月に建設5団体と連名で公表した「もっと女性が活躍できる建設業行動

計画」では、女性技術者・技能者を5年以内に倍増させることを目標として掲げており、今年がその4年目にあたる。日建連では、同じく2014年8月に「もっと女性が活躍できる建設業を目指して－日建連の決意－」を策定した後、これまで男性中心であった建設生産方式を女性が持てる力を存分に発揮できるものに再構築するためのさまざまな取り組みを進めてきた。これらのフォローアップを目的として、けんせつ小町委員会が今年6月にとりまとめた「建設業における女性活躍推進に関する会員企業アンケート」の調査結果によると、2年前と比較して、女性の現場監督がいない会員企業は44%から22%に半減し、1社当たりの女性現場監督平均人数は、6.4人から12.0人へと倍増したことが明らかになった。また、現場事務所や現場内に女性専用トイレの設置をルール化している会員企業もほぼ倍増しており、女性も安心して働ける環境整備と並行して、女性の活躍が着実に進展していることがうかがえる（表－3）。

日建連での約4年半の活動は、けんせつ小町活躍現場見学会のほか、チーム登録制度や表彰制度の創設、現場環境整備マニュアルの作成、フォーラムやセミナーの開催、広報誌やホームページを使った積極的な広報活動など多岐にわたり、会員企業と一緒に取り組んできた。そして、自分たちで変えていこうと女性たちが積極的な姿勢で取り組んでいる建設業界の女性活躍推進活動は、近年、“女性が”から“誰もが”へとさらに一步進んだ展開を見せている。女性が働きやすい環境づくりには大多数を占める男性の理解と協力が不可欠であり、一緒に取り組むことで相互理解やコミュニケーションも一層深まる。育児中など就業時間に制約のある女性でも無理なく働ける体制や制度が整えば、諸事情によりフルタイム勤務が難しい男性もそれらを活用でき、ひいては全員の働き方改革につながっていく。現在、事業所、個社、団体単位で行われている取組みが全体に広がり、さらには建設業界の“当たり前”へと変わっていくことを目指して、誰もが働きやすい・働きたいと思える業界へと発展していきたいと考えている。



① 小学1年生



③ 小学3年生



② 小学2年生



④ 小学6年生

図-1 絵日記

表－３ 建設業における女性活躍推進に関する会員企業アンケート

〈調査の概要〉

①調査対象	日建連会員企業 140 社
②調査期間	2017 年 3 月 9 日～2017 年 4 月 27 日
③調査の主な項目	1) 建設業で働く女性の活躍推進 2) 女性技術者の活躍推進 3) 女性技能者の活躍推進 4) 女性管理職の活躍推進
④回収結果	94 社より回答（回収率 67.1%）

〈調査結果の主なポイント〉

調査項目	前々回調査（または前回調査）との比較
◆建設業界での女性の活躍や女性の入職を歓迎するアピールは進展	
広報誌やホームページを活用	66% → 85%
会社説明会での PR	68% → 74% ※ 2
◆女性が安心して使用できるトイレ等の設置は改善	
現場事務所に女性専用トイレの設置をルール化 ※ 1	27% → 47%
現場事務所に女性専用トイレがある現場の割合	「60% 超」と回答した企業は 22 社 ※ 3
現場内に女性専用仮設トイレの設置をルール化 ※ 1	22% → 46%
現場内に女性専用仮設トイレがある現場の割合	「60% 超」と回答した企業は 8 社 ※ 3
現場事務所に女性が安心して使用できる専用の更衣室を設置している現場の割合	「60% 超」と回答した企業は 9 社 ※ 3
現場内に女性が安心して使用できる専用の更衣室を設置している現場の割合	「60% 超」と回答した企業は 4 社 ※ 3
◆女性の現場監督や技術系従業員が「0 人」の企業は半減	
女性の現場監督数「0 人」	44% → 22%
女性の技術系従業員数「0 人」	18% → 10%
◆技術系女性従業員は増加	
女性の現場監督数の 1 社当たり平均人数	6.4 人 → 12.0 人
女性の技術系従業員数の 1 社当たり平均人数	35.2 人 → 40.1 人
◆現場における出産や子育てをサポートする制度の導入	
現場配属の自社の女性技術者に時差出勤を活用	12 社 → 29 社
◆女性役員は増加	
女性役員がいる企業	12 社 → 18 社

※ 1：一部現場でのルール化も含む

※ 2：前年度より調査

※ 3：今年度より調査